

地域構造と地誌に関する方法論的諸問題

齋 野 岳 廊

Methodological Problems on Regional Structure and Regional Geography

Saino Takero

Summary

Purpose of this article is to examine methodological problems on the concept of regional structure and regional geography for the advance of methodology in this science.

Main points of arguments addressed in the paper are as follows;

The so-called concept of a region provided us common base for the systematic geography and regional geography. But we should keep it in our mind that we can't analyze a region without the concept of regional structure. Because they are complimentary each other as like as figure and background in Gestalt psychology.

The attempt of reformulation started from the author who defined the concept of regional structure is homologous to regional geography.

As Hettner's type of regional concept is obsolete by difficulty of operation, the concept of regional structure and regional geography are not suitable to express our concerns of present geographers.

The author showed some directions of geography by methodological examination, and the author's final object is to obtain the critical opinions of Japanese geographers in the future.

1. はじめに

一般に、地理学は系統地理学と地誌学に大別されるが、具体的な「地域」を研究対象としている点で共通性をもっている。その「地域」¹⁾をどうとらえるかをめぐっては長らくさまざまな論争

1) 筆者は、すでに地域研究の新しいフレームワークとして「仮説レベル」、「分析手法・概念」、「科学分類」の三側面から一つの試案を提案したことがある(齋野、1975)。

が繰り広げられてきた。その最たるものが、「地域实在（個体）説」と「地域便宜説」の対立であろう（高阪、1982）。前者は、フンボルトやリッターにはじまり、リヒトホーヘン、ヘットナーなどのヨーロッパ勢が主導した仮説で、わが国の地理学界にも多大な影響を与え、いわゆる「地誌学派」の成立をみた。それは現在でも、中学校社会科や高等学校地理歴史科の教員免許状の取得に必要な単位として「地誌」が義務づけられていることにも如実にあらわれている。地域实在（個体）説が主としてヨーロッパ大陸で培われたのに対して地域便宜説は、アメリカを中心に提唱された学説で、地域の実在性を否定し、地域は地表上の諸現象の空間分析を進めるための単なる分析枠ととらえている点に特色がある。つまり、地域实在（個体）説は地域それ自体を研究「対象」として研究を進めていくのに対して地域便宜説の考え方では、いわば地域は地理学研究の「方法」として採用されているのにすぎないのである。しかし、すでに木内（1968）が指摘しているように、固有の位置関係によって自然的要素や社会的要素が複雑な因果関係の連鎖によって地域の個性を形成している場合、地域便宜説による地域認識は大きな問題点を残す考え方であるといえる。今日では、かつての「空間（国家）有機体説」のような単純に生物の構造や成長をアナロジーにとった地域個体説の考え方は大幅に後退したが、地域を単なる寄木細工としてとらえるのではなく、その部分およびその要素間に機能的関連性を認め、なんらかのまとまった構造として一個の地理学的存在としてとらえる（木内、1968）ことは、現段階においても地理学研究に共通のパラダイムとして承認されよう。

本稿の目的は、地理学研究の中心的パラダイムが「地域」の認識と分析にあることを踏まえ、(i) 地域の研究は地域構造のフレームワークの中ではじめて貫徹すること、(ii) 地域構造の研究は、ひいては地誌の研究に発展する必然性をもっていること、および (iii) 地誌研究の社会的意義の一つは地域ビジョンや地域像を提示することにある、などの諸点をあきらかにすることである。

II. 地域と二元論の克服

地域が単なる事象の集合ではなく、全体として一つの統一性を持ち、無機的な事象の分析によってはアプローチすることのできない存在である、という地域についての概念が確立したのは、近代に入ってから地理学をとりまく環境変化によるものである。すなわち、それは19世紀末に地質学、地形学、気候学、地球物理学などの自然科学や社会学、人口学、民俗学などの人文・社会科学が地理学を母体として分離・独立していき、地理学の構成分野が大幅にせばめられ、また地人相関論に代表されるような環境論の論拠が否定されたときに、地理学独自の領域の明確化と方法論的打開をあわせてめざした挑戦的な試みであったわけである（千葉、1961）。ただし、地域を概念的に規定し、地域の研究こそが地理学のめざすべき目標であることをもっとも明確に示したのは、ドイツの地理学者A. ヘットナーであった。

ヘットナーによれば、地理学には二つの視点（地域的視点）が存在することが明確にされた。一

つは、場所ごとの空間的多様性と、多様な諸地点の事象間にみられる空間的結びつきをあきらかにする視点である。具体例としては河川網や大気循環システム、交通圏の存在などがあげられる。そもそも地表上に生起する諸事象は、ほかの諸地点に対する空間的位置関係を把握することによってはじめて理解が可能になるからである。二つ目は、ある場所において同時に存在するさまざまな自然界の、そしてそのさまざまな現象相互間にみられる因果関係をあきらかにする視点である（手塚、1991a）。そのような現実の地域における事象・現象間の複雑な因果的連関パターンの具体化は、すでに籠瀬（1957）や千葉（1972a, b, c・1973）が「地域構造図」として表現している²⁾。

以上のようなヘットナーによる地域的視点（コロロジエ的視点）の二重性（手塚、1991a）は、いわゆる「系統地理学」と「地誌学」という地理学における二元性の問題とも関連している。図1に示すように、系統地理学の考え方は、地表（地域）の構成要素の一つまたは複数の要素に着目して、地域（場所）が変化することにより分布パターンに地域差が生じる原因を考察していく。もとより、そのような分布パターンの地域差は原因となるほかの事象とのかかわりの中で発生したものと考えられるので、関連するさまざまな分布パターンを複数枚、重ね合わせることで（オーバーラップ）によって地域差が生じた原因をあきらかにしていく。このような一連のプロセスが系統地理学の方法論である。たとえば、世界の気温分布図などを使って地表（地域）の自然的構成要素の一つ

| 地域（地表） 地表（地域） の構成要素 | | 地域 A ≠ | 地域 B ≠ | 地域 C ≠ | 地域 D ≠ | 地域 E … | 全 域 (地表全体) | |
|---------------------------|---|----------|--------|--------|--------|--------|--|--|
| | | | | | | | | |
| 自然的要素 | 地形 気候 水文 植生 動物 : etc. | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | → 地形学 系 → 気候学 統 → 水文学 地 → 植物地理学 理 → 動物地理学 学 : etc. 立 | |
| | | 自然地理学の成立 | | | | | | |
| | | ----- | | | | | | |
| | | 人文地理学の成立 | | | | | | |
| | | ----- | | | | | | |
| 人文的要素 | 経済 政治 交通 集落 人口 : etc. | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | → 経済地理学 学 → 政治地理学 の → 交通地理学 成 → 集落地理学 立 : etc. 立 | |
| | | 人文地理学の成立 | | | | | | |
| | | ----- | | | | | | |
| | | 自然地理学の成立 | | | | | | |
| | | ----- | | | | | | |

図1 地理学における二つの視点（系統地理学と地誌学）

2) 千葉が月刊「地理」誌上に連載した「地域構造図について（1）（2）（3）（4）」の筆者の所見は齋野（1973）を参照。

である「気候」現象が赤道をはさんで北極や南極に向かうにつれて熱帯気候から寒帯気候に変化していく地域的傾向が把握されたとする。つまり、気候の地域差の基本的原因は太陽放射と地表上の緯度によって規定されるが、このような地球的な規模の気温分布の地域差は、植物分布の地域差にも直接に影響し、各地の第一次産業のありかたや地域差にも反映し、ひいては、各地域で成りつつ生活様式や住民の価値観などにも影響を及ぼすのである。ヘットナーの地域的視点の第一の命題が意味するところは、「地表上の事物・事象はそれぞれバラバラに存在しているのではなく、相互依存の関係によって存在している」というものである。

ただし、系統地理学の方法は、地域的視点の一翼を担うものではあるが、それだけでは地理学の独自性を確立する上で十分であるとはいえない。たとえば、石油の探掘師は、ボーリング調査を行うまえに、地質図や地形図などの上で、石油の埋蔵可能な場所を仮定する。つまり、石油が地域的に偏在した資源であることを認識した上で作業にあたるのである。その方法はまぎれもなく、系統地理学の方法そのものである。別に地理学者でなくとも、必要性があれば、事物・事象の地域差を問題にするのであり、地域差の原因・解明をめざすだけでは地理学の独自性は影をひそめてしまうといえる。

そこで、地理学の歴史的伝統を踏まえ、地理学以外の諸科学に対しても研究対象の独自性と方法論的特色をどこに求めるかが要請されるのである（ヘットナー、1927、千葉、1961）。さきの図1を使って考えると、地表（地域）を構成する諸要素は、既述のように地域間（場所間）で異なった空間的パターンを示すが、他方では、地表を構成する地域（大陸、地方、国…）ごとの特色（＝地域性）がどのように形成されてきたかを考察していく視点が浮かび上がってくる。すなわち、高橋（2001）の言辞を多少修正して述べれば、地表を構成する存在（要素）として事物・事象や地域を認識するという視点は地理学者のみが採用し得るユニークなものの見方といえる。

さて、「ヘットナーによれば、地域を構成する自然的ならびに人文的な諸要素は、個々ばらばらに存在するのではなく、相互に因果関係によって結合されている。これらの因果関係の総合によって、あらゆる地域は独自の個性をもっている。ヘットナーは、このような個性を地域性とよび、地理学は地域性を研究する学問であると定義」した（能、1973を一部修正）³⁾。このような考え方は、やがて地理学の本質は地誌学であるという思想につながり、今日の地理学の中心的なパラダイムとなったのである。いうまでもなく、「地域」を研究対象にすることは、自然的ならびに人文的な構成諸要素を過不足なく取り上げなければならず、そこには自然地理学と人文地理学との垣根はなくなり、地表の構成諸要素ごとに成立するすべての部門別の地理学（例 地形学、気候学、…、経済地理学、政治地理学、…）は「地誌学」の中に統合され、その結果、「単一の地理学」が成立

3) このような地域の定義ではかならずといってよいほど、地域の構成諸要素間の結合状態にみられる因果的連関の「総合」によって地域は独自の個性をもつといわれているが、籠瀬（1957）や千葉（1972a, b, c・1973）を見る限り、方法論的には構成諸要素間の因果的連関の「分析」と地域の個性を把握する「総合」とはあきらかに矛盾するといえる。つまり、総合とは地域の構成諸要素の単なる寄せ集めではない以上、分析の方法で求められるのではなく、全体を瞬時に把握するほとんど「直観」に近い方法によって達成されると考えられるからである。ちなみに、川喜田（1973）は地域データをまとめる上で「KJ法」をベースにした霊感的ともいうべき「直観」のはたらきを強調している。

する。そこには、自然地理学と人文地理学といった二元論（dualism）は解消され、「地域」を総合的に考察することを本旨とした地理学独自の視点と方法が確立されるのである⁴⁾。

しかし、周知のようにこのようなヘットナー流の地誌学に対してもっとも手厳しい批判を加えたのが、景観学派の巨匠・シュリユーターであった。その主な批判点は、つぎのようにまとめられる。

(i) ヘットナー流の自然・人間関係の地理学では、地域を構成するあらゆる自然的、人文的な事物・事象を考察の対象にしなければならなくなる。シュリユーターのことは「地理学の研究すべき対象が、まったく限定されない全事象群に及ぶことになる。」（手塚訳、1991b）それでは、研究者によって研究対象の選択が恣意的になってしまうおそれが十分にある。いうまでもなく、科学の立場はつねに「客観性」を確保することにある。たとえば、ある水溶液が酸性かアルカリ性かはリトマス試験紙を使って調べることができるが、その実験者によって結果が変わるようなことはない。だれが調べてみてもアルカリ性はアルカリ性と判定され、何度試してみても結果は同じである。したがって、人々は科学に対して絶大な信頼を寄せるのである。ところが、地域を研究する場合に、研究者によって研究範囲や研究対象が恣意的に変わってしまうようでははたして科学的といえるのだろうか。ただし、ヘットナー自身も、「われわれ地理学者は、地球上のどこでもまったく一様に分布する現象や、あるいは場所による違いがあっても分布に何ら規則性が存在しない現象を無視するとともに、その場所的差異がその他の事象群と、少なくともわれわれの認識において、何ら関係をもたない事象を無視する。例えば、地誌的な記述のなかで、われわれが地磁気について言及することはほとんどあるまい。」（手塚訳、1991b）とは述べている。しかし、地域を地誌的に研究する場合、「扱うべき素材の多様性はきわめて大きく、研究対象の選択上の恣意性は免れ得ないといえる。

(ii) ヘットナー流の地域論に対してシュリユーターは、「一つの学問分野の存立基盤を、現象間の特定の因果関係に求めることは、しかしながら、できない相談である。なぜなら、原因というものは、そのつど探究されるべきものであって、決して前もって予見することができないからである。地理学においても状況はまったく同じである。」（手塚訳、1991b）ときわめて手厳しい。また、格調高い文章で、「地理学は、陸地、水界、大気、さらには全生物界（ここには人間とその全生活事象が含まれる）のすべてを、それら相互間の因果的連関において捉えようとする。ある事象が他の事象をどのように規定しているか、また、すべての事象が関連し合うことによって、一つの全一、地域、そして最終的には地表全体がどのように成立し、組み立てられているのかを地理学は把握しようとするのである。これは実に壮大にして広範な目標である。しかし、地理学はそこで困難な立場に立たされることになる。」（手塚訳、1991b）と皮肉をこめてヘットナー流の地域的観点の

4) すでにふれたように、地理学には系統地理的研究と地域的研究があり、それに自然地理学と人文地理学の分立が加わり、二重の二元論が成立しているが、木内（1968）によれば、アッカーマンは、系統地理学（一般地理学）と地誌学の結合を「世界地誌」に求める方向性を示しているという。しかし、木内（1968）は、系統地理的研究と地域的研究とは相互に補完し合う関係にあるものの、アッカーマンの提起した「世界地誌論」では、地域レベルに応じた地域性の発現が異なるので、無理があると否定的である。

本質（地誌学的視点）を否定している。

ちなみに、シュリユーターは、地理学が研究対象とすべきは、自然と人間との交互作用によって形成された「文化景観」にあるとし、研究者による考察対象の恣意性を排除し、客観性を確保した科学的な地理学の確立をめざした。それはあたかも、地形学が具体的な地形面を研究対象とすることにより、長足の進歩を遂げたように、文化景観をその位置や規模、形態、相互関係などから考察することにより地理学の科学化、一元化をめざしたものといえることができる。

ところで、ヘットナーとシュリユーターは、その研究方法や対象認識などをめぐって鋭い対立を示したが、前者は「地域」を後者は「景観」をキーワードに地理学を文理融合型の統一科学としてとらえていた点では一致している。

Ⅲ．地域から地域構造へ

「戦後に書かれたわが国の地理学の論文には、地域構造を扱い、それを表題としたものが目立っている。地理学的研究には、位置、分布あるいは環境等の諸概念に伴って地域構造についての考察がなければならない。」（木内、1968）この文章は、『地域概論』の中で木内が述べたものである。

ここでは、木内（1968）の立論に依拠しながら、(i) 地理学が研究対象としてきた「地域」の概念がどのような理由で「地域構造」の研究へと発展を遂げるようになったのか、また(ii) 多様な語義をもつ「地域構造」をどのように定義するべきか、などの諸点について取り上げていく。

すでに述べたように、ヘットナー流の「地域」の考え方によると、地域はその自然的、人文的構成要素の複雑な因果的連関によって独自の地域的特色・個性（地域性）を示すとされたが、問題は、そのようにとらえられた地域がもつ「個性」をどのように検証するべきかについて具体的な方法論が確立されていない点である。地理学研究者がある特定のエリアを設定し、その地域の個性をあきらかにしたとしても、それは所詮、研究者の主観にすぎないのではないか。そもそも地域の個性をあきらかにすることなど方法論的に可能であるのか、仮に、地域の個性をあきらかにできたとしても、はたしてそれはどのような検証手続きを経て可能となるのか、など疑問は広がるばかりである。

そこで、ある地域の個性をあきらかにする方法の一つとして、ほかの地域・地域群との比較・考察があげられる。すなわち、当該地域を対照とする他地域と比較する、また全体地域の中で位置づけることなどによって当該地域が示す個性をあきらかにする方法である。さきほど地域構造が多義的であると述べたが、地域構造の一つのとらえかたとして、部分地域がそれぞれの機能的役割（地域的機能分担）をはたしながら、全体地域を構成しているという視点があげられる。すなわち、当該地域の個性を地域構造のコンテキストの中でとらえる視点である。たとえば、かつての大都市圏周辺地域における地価の高騰化現象を例に多少敷衍してみたい。東京大都市圏の場合、首都東京への通勤・通学といった人口流動が市街化前線拡大の営力として地価の高騰化現象に絶大な役割をは

たしたが、その結果、通勤者階層にとって住宅適地であるかどうかが大都市周辺地域での地価高騰化現象を解明する鍵となっていた⁵⁾。にもかかわらず、大都市周辺のある場所を「地域」に設定して、その地域内部だけをいかに詳細に分析してみても当該地域の通勤限界地としての個性をあきらかにすることはできない。いうまでもなく、東京と当該地域との「関係位置」を考慮にいった東京大都市圏という一つの機能地域（全体地域）の中で把握しなければならないであろう。つまりは、地域と地域との結合関係、競合関係、階層関係など、当該地域を含めた全体地域の中でとらえていくマクロ的な視点あるいは概念装置が必要になってくるのである。そうした経緯から「地域」の概念に加えてあらたに「地域構造」という概念が必要になったものと考えられる。

つぎに、地域構造を概念的にどのようなとらえるかであるが、高橋（1997）も述べているように、「地域構造は多様な意味を有する。地域と構造の両者の用語が広い意味をもつため、人によって理解が異なるからである。」しかし、『地域概論』の中で木内（1968）は、地域構造と銘をうった研究論文を整理した結果、地域構造と理解される類型は、次の二つのタイプに分けられるとした（本稿では、便宜的に（a）タイプ、（b）タイプと表記する）。

（a）一地域を構成している諸要素（elements）と諸因子（factors）の関係を扱うもの。

（b）複数地域の相互関係を指すもの。全体と部分、階層、並列等の体系を指す。

まず、（a）のタイプの地域構造の具体例としては、黒部川扇状地における流水客土事業の導入にかかわる地域条件と農業などの相互連関関係を「地域構造図」として示した籠瀬の研究（1957）をはじめ、千葉による一連の研究（1972a, b, c・1973）があげられる。千葉は、地域構造を木内の（a）タイプに限定して使うことを提言している。すなわち、「地域構造とは「地域」の構造であり、構造とは全体とその部分および部分相互の間にみられる関連状態を意味する」と述べ、木内の（b）タイプは広義には（a）タイプに含めてさしつかえないとしているが、こうした千葉の見解に対して高野（1973）は、（a）タイプのような「一つの地域のなかで、地域を構成する自然的・経済的・社会的などの諸要素の結合関係によって作り出される全体的まつまりは、それ自体が地域そのものであって、これを地域構造と呼ぶのは正しくない。」と否定している。その意味では、籠瀬や千葉に代表される地域構造の考え方は、「地域の構造」と表記するのが妥当であるといえる。それに加えて地理学の立場からは、地域の機能構造があきらかにされたとしても、「空間性」を考慮に入れない地域構造の考え方は本質的であるとはいえない。また、そもそも地域を構成する要素や因子といっても、研究者によってその意味するところが一定していない。その点で、周知のように「気候学」では、気候を構成する、気温、風、降水などを「気候要素」と定義し、それらの気候要素の地域的差異（地域的パターン）に影響を与える、たとえば、緯度、海拔高度、隔海度などを「気候因子」と定義し、気候要素と気候因子の語義や相互関係がきわめて明確に規定されている。

5) 日本的な独特な地価上昇のメカニズムがすでに解明されている。すなわち、わが国の大都市圏縁辺部のいわゆる「通勤限界地」における戸建住宅の取引事例が地価水準（ただし、地価の絶対額ではなく、地価の上昇率）を決定し、その通勤限界地での地価上昇率が基準となって順次、郊外から副都心へ都心へと地価上昇の波が空間的に波及していくことによって大都市圏全体の地価水準が形成されるというものである。このような地価形成の理論は新沢、華山両氏によって提起されたもので（いわゆる「地価上昇の限界地需給説」）（新沢・華山、1976）、戦後のわが国を代表する地価形成理論の一つとなった。

それにひきかえ、人文地理学においては、要素や因子の語句が恣意的に使用され、かなり曖昧さを残している。

つぎに、(b) タイプの地域構造は、「構成する部分地域は、等質地域であっても結節地域であってもよいが、それら複数の部分地域は、ただ単にばらばらに無関係に併存しているのではなく、何らかの機能的つながり、ないしはまとまり」(高野、1973)をもった概念を意味している。このタイプの地域構造の具体例としては、フォン・チューネンが自らのテロー農場での農業経営に基づいて1826年に著した不朽の名著『農業と国民経済に関する孤立国』の研究があげられる。すなわち、チューネンは、孤立国における都市からの市場距離によって都市を中心として自由式農業、育成林業、輪栽式農業、穀草式農業、三圃式農業、牧畜業と6圏にわたって異なった農牧業経営方式による第一次産業地域が同心円構造状に成立することを理論的にあきらかにした。各圏域に成立するような各産業地域はおのおの等質地域であるが、中心都市(市場)に対する交通位置という機能的関係において孤立国の地域構造を形成している。ただし、木内(1968)は、フォン・チューネンの孤立国は「地域構造(正しく言えば空間構造)についての分析である」が、中心都市への従属性に基づいた地域構造であるため、各部分地域間に完結性はない、としている。しかし、孤立国における各産業地域は、それぞれ異なった農牧業経営方式のもとで、中心都市を媒介として相互に補完的な関係にあることはいうまでもなく、孤立国という全体の地域構成に関与している。地域論的には、フォン・チューネンによって各農牧業の等質地域が中心都市からの距離を媒介として機能地域を形成している点がはじめてあきらかにされたのである。その意味では、フォン・チューネンこそ、機能的地域構造論の始祖というべきであろう。

ちなみに、フォン・チューネンが示した中心都市からの交通距離の変化によって、一種の機能的地域分化が生じるというアイデアは、その後の都市地域や大都市圏の空間構造の説明原理として地理学だけにとどまらず、都市経済学や空間経済学などの確立に多大な貢献を示したといえる。すなわち、大都市圏の中核を担う中心都市(都心+周辺市街地)は、その業務機能を完遂するために不足する膨大な労働力を郊外地域から吸引し、その結果、都心と郊外との間には朝夕に巨大な通勤流動を発生させている。そして中心都市は、郊外からみれば所得の稼得地域としても機能しているが、郊外地域の近郊農業等によって提供される一次製品の消費を不可欠としている。このように大都市圏を構成している部分地域は、その各々が特色(個性)をもった地域であることにより、いかえれば地域的な役割分担をはたしながら、相互補完的に大都市圏という機能地域を形成している。まさにフォン・チューネンが提起した『孤立国』の機能的地域構造モデルは、現代都市や大都市圏のスケルトンを有効に説明する空間モデルとなったのである。

ところで、木内(1968)は、「完全なる地域構造は、(a)、(b)両者を特色づけている組織を持ち、その発生、機能、および形態から説明されなければならない。」としている(この文言は、筆者の理解では、「地誌」にはかならないと考えるが、その要旨はⅣでとりあげる)。したがって、フォン・チューネンの『孤立国』のような抽象化された地域を扱う場合は、「領域(エリア)構造」

(areal structure) とよぶことが望ましいとされている。さらに木内（1968）は、(a) タイプの場合は、「地域の構成」(composition of a region) とよび、(b) タイプの場合は、「諸地域の組織」(system of regions) とよぶことを提案している。

木内は基本的には地域構造を上述のように (a)、(b) の二つのタイプに分けているが、複数の「地域が空間的にみて全体と部分の関係あるいは上下の系列を作ることが多い」ことから、とくに「地域階層」という概念で地域の重層的な階層構造の存在を指摘している⁶⁾。すなわち、「ある広さの地域が集まり、それよりもより大きなまとまりのある中地域を構成し、さらに、中地域がいくつか集まってより高次な大地域が集合している状況」（高橋、1997）をさしている。歴史上、このような地域構造の階層性を問題にしたのは、都市の「中心地理論」を提起したW. クリスタラーである。今日の都市圏理論の基盤となった理論で、高野（1973）によれば、「都市的中心地とその周辺の農村地域との結合関係から形成される都市圏は、結節地域であるが、これはそれだけで一つの地域構造をなすとともに、複数の都市的中心地群とそれらの都市圏群とが集まっている網状パターンは、大都市圏→小都市圏への階層的構造を持つのが普通で、それらは全体として機能的に組織され、そこに地域構造を認めることができる。」としている。さらに、高野（1987）は、「現代の社会生活においてもっとも現実的で重要な意義をもつ地域構造、われわれの日常生活を実質的に規定する地域構造」とは、「住民の日常生活に基盤を置く都市圏にもとづく地域構造以外の何ものでもなく、またそれは大一中一小の中小都市の階層構造を含む都市圏システムの地域構造をなす」ものと結論づけている。繰り返せば、高野による地域構造の定義は、「空間性」を重視した、あくまでも「地域と地域との結びつき（階層的なタテの結びつき、および並列的なヨコの結びつきを含む）による体系（システム）を重視したものである。

ただし、ここでは、ヘットナー流の地域論の主張をふまえ、さきにもふれた木内（1968）による完全な意味における地域構造の観点から、一応、地域構造をつぎのように定義しておきたい。すなわち、地域そのものの成り立ちや個性（特色）を、地域を構成する自然的・人文的諸要素の検討から総合的・直観的にあきらかにし、個性をもった地域同士がさまざま空間的、機能的な関係（例 共存、競合、階層、…）をもつことによって地表を構成している状態を地域構造、と定義する。ただし、地域構造を構成する各地域（部分地域）は一定の手続きを経て科学的に区分する必要があるが、本稿では立ち入らない⁷⁾。

6) 地域の階層性をもっとも明確に示しているのは、行政地域で、市区町村一都道府県一国の系列であり、それらは結節地域としての完結性をもっている（木内、1968）。地理学では、行政地域は形式地域的一种として実質地域（等質地域、機能地域）の研究に比べて軽視されてきたきらいがある。しかし、いうまでもなく、行政地域は住民の権利・義務関係などを規定する強制力をもった領域であるから、その意味では実質地域以上に重要性を示す場合がある。また、選挙区制の地域割にみられるように、その設定いかんによっては国民・住民の権利行使に重大な影響をおよぼすケースもあり、形式地域的一种ということだけではけっして軽視できない側面をもっている。

7) いわゆる「地域区分論」は、地域の概念、本質を論議する「地域論」とならんで、地理学方法論上の両輪を構成しているといっても過言ではない。すなわち、地域の個性（特色）を明確にとらえるためには地域区分を正確におこなうことが必要不可欠であるからである。また、地表は、さまざまな方法、指標によって複数の地域に区分されるが、最小地域が集まって中地域を構成し、さらに中地域が集まってよりいっそう大きなまとまりのある大地域を構成している。このように複数の部分地域が集まってそれぞれの役割を分担しながら、全体地域を構成している状態を地域構造と定義すれば、地域区分の意義がいかに重要であるかがうかがえる。

IV. 地域構造と地誌

ここでは、「地域構造」の分析・研究がひいては「地誌」の研究・記述にほかならないことを検討するが、まず、「地誌」が従来どのように理解されてきたかを確認しておきたい。

木内(1968)は、地理学が社会的に重視される根拠の一つとして「知識としての地誌」の貢献を指摘している。人類は洋の東西を問わず、自らの生活環境や未知の世界に対してあくなき探究心を持ち、文字や地図等を用いて記録してきた。わが国でも、国内制度が整いはじめた8世紀には国別地誌の嚆矢とされる『風土記』が編纂された。とりわけ『出雲風土記』などはわが国の成り立ちを知る上でも不可欠な情報を提供している。そして近代国家が成立してからは、郷土や国土、世界についての地誌的知識は初等・中等教育を通して必修化され、国民教育の一翼を担う重要な科目になった。Iでもふれたようにわが国の中学校社会科、高等学校地理歴史科の教員免許状を授与されるためには、「地理学」の単位とならんで「地誌」科目も必修化されている。ただし、わが国では、系統地理学を中心に高度な専門化や細分化が進み、「総合性」を基調とした地誌の研究は戦後になっては後退傾向にあるといえる⁸⁾。

「知識としての地誌」は、近代地理学の発達に伴って「体系的な地誌」として再度、出現した。木内(1968)は、「体系としての地誌」の特徴として、(i)内容的にみて、地域概念が明確に定着し、地域を構成する諸要素の関係が因果的に説明されるようになったこと、(ii)内容を反映して、地誌の編集が一定のタイプをもつようになったこと、の二点をあげている。このような近代地誌学が確立する上で、リヒトホーフエンやヘットナー、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュなどの名前を忘れることはできない。とりわけ、ヘットナーは、地表面を地誌科学的に研究する学問として地理学を規定し、「地理学＝(イコール)地誌学」という20世紀における地理学上の一大潮流を形成した。「特定の地域で自然と人間がどのように成立しているかを研究する地域研究(地誌)は、地理学の理想を達成する究極の目標」(斎藤 功、1997)とさえいわれ、地誌は「地理学の精華」と称えられてきた。

それにもかかわらず、地誌学の衰退傾向に歯止めがかからなかった事情とは何であったのかが真剣に問われる必要がある。その理由の一つは、さきにもふれたように、地誌は地域の総合的な性格(特色)をあきらかにし、説明・記述することであるといわれてきたが⁹⁾、個々の地域構成要素

8) ただし、日本地誌研究所が編纂した『日本地誌』全21巻(二宮書店)は、羅列的であると総花的であると、いろいろと批判されてきたが、世界的には誇るべき研究成果であるといわれている。また、かつて旧国立大学の某地理学教室では「地誌学」に二つの講座を設け、多数の研究者を養成してきた。しかし、現在では、地理学研究者で、「地誌学」を専門分野と申告する人は少ない。

9) 系統地理学、とりわけ自然地理学は法則定立的科学を志向するが、地誌学は個性記述的な科学で、系統地理学があきらかにした法則群を援用して地域を記述する一段と低い段階の学問と認識されてきた。しかし、M. ウェーバーはリッケルトの科学認識論に依拠して、普遍的に妥当する関係概念としての法則を追及する法則定立的科学の認識方向と歴史的な意義をもつ個性的な事物概念としての個体把握の認識方向の二つの方向性に対して、いずれも優劣はつけ難い趣旨のことを述べている(大塚、1966)。それから類推すると、科学の名に値する認識方向は、系統地理学のような法則定立的科学だけにあるのではなく、地誌学のような個性的な事象の記述にも同等に認めることができよう。ただし、これまでの地誌学が方法論的に成功してきたかどうかはまったく別問題で、厳しく問われなければならない。

の因果的連関の分析からどのようにして地域を「総合的」に説明していくのか、その具体的な方法はいまだに確立されているとはいえない。たとえば、山本・中西（1997）は、「地域を、自然事象から人文事象まで視野に入れて総合的に考察することは、理念的には提唱できるが、実際に行うことは困難である。」と否定的に述べている。さらに、いま一つの理由としては、「地域の個性の検出においては、研究者の主観的な判断が入り込みやすく、万人が納得するような科学的手続きは確立されていない。」（山本・中西、1997）ことも地誌の困難性を示している。同様な指摘としては、「同じ地域を二人の研究者が扱った場合も、まったく同じ地誌はできないであろう。」と木内も述べている（木内、1968）。つまり、方法論的には、すでにヘットナー流の「地域」のとらえかたは事実上破綻しているものであり、したがってその延長線上にある「地誌」を構成する営みも、いわば画餅にすぎないといったらいいすぎであろうか。

しかしながら、人類の活動空間である「地表」は、その多様な自然環境の下で、多彩な生活文化をうみだし、各地に特色ある「地域」を成立させていることも事実であり、地理学の独自性を「地域」の研究におく視点は捨てがたいといえる。周知のように、近代地理学が到達した重要な結論の一つは「地域」が単なる分析の枠組みではなく、それ自体が研究対象であり、具体的・実質的な内容をもった存在であるという認識である。ただし、すでにⅢでもふれたように、「地域」は、決して閉鎖的な空間ではなく、全体地域の中で位置づけ、さらに他地域との比較・考察によってはじめてその個性（特色）が明確化されるのである。そして、地域は全体地域の中においてそれぞれの役割・機能を分担（機能的地域分化）しながら、全体地域を構成しているのである¹⁰。このような認識から「地域構造」の概念がうみだされたのであり、したがって地域の研究は必然的に地域構造の研究に向かうことになるのである。つまり「地域」の研究は、「地域構造」の研究に進んでこそ、本質的な成果が得られるのであり、そして、完全な意味での「地域構造」の研究（木内、1968）とは、結局のところ、「地誌」の研究に進んでいくことにほかならないのである。本稿の最後の論点として地域構造と地誌とは、一見、別物のように映るが、理論的には同等ととらえるべきものであることを提起したい。

ただし、本稿で提起した「地域構造」の研究が「地誌」にほかならないという視点には、留意すべき点がある。それはすでにふれたように、「地域」を構成する自然的、人文的構成要素の因果的連関の分析から地域の個性（＝地域性）を総合的にあきらかにすることは事実上、困難であり、かりに研究者の主観上は可能であるとしても、それはせいぜいのところ、「地域ビジョン」や「地域像」の提起にすぎないことを認識すべき点である。たとえば、いま任意に、ニューヨーク、パリ、ロンドン、東京、上海、と5つの大都市を並べた場合、それらが個性をもった巨大都市であることはあきらかであり、同じと考える人はいない。そこで、それらの大都市を多数の変数から因子分析

10) 地理学における「地域」の研究目標はその個性（特色）をあきらかにすることにあるが、「地域」は全体地域の中でそれぞれの役割・機能を分担（機能的機能分担）しながら全体地域を構成している（→「地域構造」）。つまり、「地域」の個性（特色）は地域構造の中でこそ明確化されるのであり、したがって、「地域」の研究は、「地域構造」の研究へと進んでいく必然性をもっているといえる。

などの多変量解析の手法で分析してみても、客観的に都市地域の個性（地域性）が把握できるとはかぎらない。それにもかかわらず、それら5大都市はあきらかに個性をもっているのである。つまり、地域の個性といった「全体性」を問題にする場合¹¹⁾、構成諸要素間の因果的連関の「分析」といった研究方法では無理な相談であり、いわば高度な「直観」などのより本質にせまる方法論によらなければならないのである。したがって、地誌を構成するに際してどれほど多数の要素・要因を取り上げてみても、所詮は研究者によるかなり主観的な「地域ビジョン」や「地域像」の提起が精一杯といったところではないだろうか。

以上のように、完全な意味での地域構造の研究がつかまるところ地誌にはほかならないとしても、そもそも完全な意味での地域構造の研究も実際には困難であるので、地理学の究極目標である「体系としての地誌」もその成立はかなり難しいというほかはないといえる。たしかに「知識としての地誌」は、近代地理学の成立にともない、「体系としての地誌」へと発展したが、「体系としての地誌」の成立が困難である以上、再度、出発点としての「知識としての地誌」へと回帰して考え直してみる必要がある。すでに注9)でもふれたように、法則定立的科学を志向する系統地理学に対して個性記述的な科学である地誌学は、たしかに地域法則とでも称すべき原理を提起できなかった以上、地域情報を詳細にストックし、地理的データ・ベース等の整備に徹することも一つの方向性ではないだろうか。また、かなり困難なテーマではあるが、地域の個性（＝地域性）をあきらかにする研究努力の結果に付随して「地域ビジョン」や「地域像」を提起することは、単に学術的な興味や目的にとどまらず、「地域おこし」や「地域振興」、「郷土意識」の涵養などといった目的に寄与するであろう。その意味では、学術的な「体系としての地誌」といわゆる地理教育で実践されている「教育的な地誌」とは相互に補完的な関係にあり、両者の間に断絶や反目があるとはならないといえよう。

V. おわりに

本稿では、これまで地理学が独自の研究対象としてきた「地域」や「地域構造」さらには「地誌」にまつわる方法論的な諸問題の若干を取り上げ、筆者なりの解釈と提案をおこなってきたが、いわゆる方法論倒れに終始したきらいがあることは反省している。しかし、どのような学問でも絶えざる反省と果敢なチャレンジ精神があってこそ、その後の偉大な個性の出現によって当該学問の発展が約束されるのであり、その意味では、現時点における地理学上のボトルネックを洗い出し、論評

11) 「全体としての地域」に直接に接近し、あるいはそれを記述することはできない、と千葉（1961）も述べているが、そこで、地域の「全体性」にアプローチする代替的方法としていわゆる「動態地誌学」（dynamic regional geography）が登場したものと考えられる。すなわち、「地誌は、その地域における現在の性格を把握して、それを中心として記述を進めなければならない。少なくとも重要な要素を真先に取り上げ、その後、次第に他の要素に入るべきである」（青野、1973）という主張である。しかし、いみじくも青野（1973）がいうように「著者の主観的傾向が強く出て、重要な要素の選択に個人的趣味が濃厚となり、客観的にみると問題が多く…」と、動態地誌学の方法論を採用しても、「全体としての統一性をもった存在としての地域」という、ヘットナー流の「地域」の概念は操作的にも扱えなくなってしまい、当然のことながら「地誌学」も成立が困難になるといえる。

を加えることには一定の意義があるものとする。

さて昨今では、「地域」の名を冠した学部や学科もみられるようになり、地理学の社会的認知が進んでいるようにもみられるが、肝心の地理学の世界では、地理学科目の名称変更や廃止、実態の不明な科目への統合化等が頻繁に進んでいるようである。ある意味では「地理学の危機」といえるのかもしれない。たしかにGIS（地理的情報システム）等の技術は、インターネットの普及や画像解析技術の発展によって今や時代の花形となった感があるが、そこに地理学の活路を見出す動きも盛んである。しかし、たとえどんなに多数の地域構成要素のレイヤーを積み重ねたとしても、GISの分析手法だけで「地域の個性」（地域性）をあきらかにすることはきわめて困難であろう。なぜならば、地域の構成諸要素の集合体が地域の個性ではないからである。地理学がヘットナー流の地域の個性をあきらかにする地誌科学の道を歩むとしても、GIS等の技術にべったり依存しているのでは困難は目にみえている。道具が学問の性質を規定することはないからである。やはり、その学問に固有のアイデアや発想、固有の研究対象や研究方法がともなってこそ、学術的にも社会的にもその必要性が認められるといえる。今、思い起こせば、1960年代後半から70年代にかけて「地理学の解体」が地理学徒の間で叫ばれた時代があったが、ある意味では、それは当時における地理学の現状を打開しようとするエネルギーの発露であったといえなくもない。しかし、現在では、なし崩し的に何回目かの「地理学の危機」が進行しているように思われる。個々の地理学者はもとより、学界全体としてもこの「危機」を広く共有し、論議を積み重ねていく情熱が求められているのではないだろうか。

また、「地理学の危機」を助長するトレンドの一つとして学際科学の発展があげられる。学際領域が拡大・発展するにつれて地理学上の研究テーマが変化していくのは、ある意味では当然のことであろう。しかし、その学問・科学に固有のバックボーンをもたずに参加してみても、有力な系統科学に地理学が吸収されていくのは必至で、「ミイラとりがミイラになる」のたとえ通り、地理学の発展に寄与することは困難となろう。その意味では、20世紀初頭に地理学方法論の確立をめざしたヘットナーがつぎのように述べた訓戒は、現在でも噛みしめてみる価値があるだろう。

「…それぞれの科学分野のあり方とその学問的内容は、もし研究努力の有効配分を犠牲にしなくては、またもし自分自身を無際限の世界に見失いたくしなければ、みずからに固有でかつ他の科学分野とは異なる一定の観点から出発して築きあげねばならない。…（略）…それぞれの科学分野は、みずからに固有な一定の内容をもたねばならないし、また、みずからに固有な一定の方法でそれに取り組み、さらには、みずからに固有な一定のやり方でそれを提示することができなければならない。そして、このような研究領域や学問領域は、決して成り行きまかせに定められるべきではなく、科学的な方法論に基づいて決定されねばならないのである。」（手塚訳、1991bを一部修正）

（さいの たけろう・本学非常勤講師）

【付記】

末筆ながら、経済地理学および経済立地論の分野で長きにわたって学会をリードされてこられた本学経済学部教授・北條勇作博士には、今日にいたるまで公私ともにわたりご指導ご鞭撻を賜って参りました。先生の本学ご退官に際しまして、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも先生のご活躍とご健康を衷心よりお祈り申し上げます。

引用・参考文献

- 青野壽郎 (1973) : 動態地誌学. 日本地誌研究所編『地理学辞典 (改訂版)』二宮書店、500.
- 秋本弘章 (2009) : 地域と地誌. 中村和郎・高橋伸夫・谷内達・犬井正編『地理教育講座Ⅲ巻 地理教育と地図・地誌』古今書院、575~601.
- 千葉徳爾 (1961) : 地域の構造分析について. 信州大学教育学部紀要、11号、201~213.
- 千葉徳爾 (1972a) : 地域構造図について (1). 地理、第17巻第10号、64~69.
- 千葉徳爾 (1972b) : 地域構造図について (2). 地理、第17巻第11号、71~76.
- 千葉徳爾 (1972c) : 地域構造図について (3) —地域概念の数学的理解. 地理、第17巻第12号、60~64.
- 千葉徳爾 (1973) : 地域構造図について (4) —地域概念の数学的理解 (その2). 地理、第18巻第1号、87~92.
- 平川一臣・守田優・竹内常行・磯崎優訳 (2001) : 『地理学—歴史・本質・方法』アルフレート・ヘットナー著 古今書院、690p. (Hettner, A. (1927): *Die Geographie—ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden, ZwitesBuch.*)
- 北條勇作 (1998) : 『経済学の一方—経済地理学の視点から』多賀出版、358p.
- 木内信蔵 (1968) : 『地域概論』東京大学出版会、370p.
- 籠瀬良明 (1957) : 富山県黒部川扇状地の流水客土事業. 横浜市立大学紀要A-12、No.65、1~168.
- 川喜田二郎 (1973) : KJ法と啓発的地誌への夢—ストーリー風に. 人文地理、第25巻第5号、1~30.
- 文部科学省 (2010) : 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』教育出版、169p.
- 高阪宏行 (1982) : 地域概念と地域構築問題. 日本大学地理学会「地理誌叢」、第23号、1~9.
- 能 登志雄 (1973) : 地域論. 日本地誌研究所編『地理学辞典 (改訂版)』二宮書店、429.
- 大塚久雄 (1966) : 『社会科学の方法』岩波書店、55~58.
- 齋藤 功 (1997) : 地誌. 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚章編『人文地理学辞典』朝倉書店、291~292.
- 齋野岳郎 (1973) : 地域分析の手法としての地域構造図. 地理、第18巻第3号、89~95.
- 齋野岳郎 (1975) : 地域分析の方法—地域研究の新しいパラダイムを求めて. 地理、第20巻第12号、165~173.
- 杉浦章介 (2003) : 『都市経済論』岩波書店、226p.
- 新沢華芽統・華山謙 (1976) : 『地価と土地政策 (第2版)』岩波書店、406p.
- 水津一朗 (1974) : 『近代地理学の開拓者たち』地人書房、235p.
- 高橋潤二郎 (2001) : 『抽象的地表の原理—地理学の理論化への挑戦』古今書院、375p.
- 高野史男 (1973) : 地域構造. 日本地誌研究所編『地理学辞典 (改訂版)』二宮書店、423~424.
- 高野史男 (1985) : 日本列島地域構造論. 立正大学地理学教室創立60周年記念論文集、『地域の探究』古今書院、377~386.
- 高野史男 (1987) : 地域構造とリージョナリズム—序説. 立正大学大学院紀要、第3号、1~9.
- 高橋伸夫 (1997) : 地域構造. 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚章編『人文地理学辞典』朝倉書店、284~285.
- 手塚 章 (1991a) : 地域的観点と地域構造. 中村和郎・手塚章・石井英也著『地理学講座第4巻 地域と景観』古今書院、107~180.
- 手塚 章 (1991b) : 『地理学の古典』古今書院、422p.
- 富田和暁 (1991) : 『経済立地の理論と実際』大明堂、282p.
- 山本正三・中西僚太郎 (1997) : 地誌学. 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚章編『人文地理学辞典』朝倉書店、292.